

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 吉岡晶子氏「子どもたちと私」講演（「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会）   |
| <b>Author(s)</b> | 田澤, 薫   |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 17-21  |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4599">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4599</a> |
| <b>Rights</b>    |   |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会 吉岡晶子氏「子どもたちと私」講演

田澤 薫

2013年度初回の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会が、4月1日に開催された。前年度までお茶の水女子大学附属幼稚園で教諭を務めておられた吉岡晶子氏をお招きし、「子どもたちと私」と題してご講演をいただいた。吉岡氏は、幼児教育の専門誌である『幼児の教育』に度々保育実践の原稿を寄せられているが、そのなかから「私の保育—子どもたちと私—」(77巻10号)、「なりきる」(90巻1号)、「保育の現場から かしわもちやさん」(107巻5号)を共通テキストとして選んでくださり、それに事例研究をされた「電車ごっこ」の事例を加えて、生き生きとした子どもたちの姿と保育者の関わりを語って下さった。「講義形式ではなく一緒に事例の検討を」という講師の呼びかけに遠慮なく応え、参加者一同、保育実践現場の参与観察者の気分で闊達に意見交換しながら吉岡氏の保育の楽しさを追体験させていただいた。以下は、報告内容の概要である。

## 「子どもたちと私」

東京都港区立幼稚園に勤めて4、5年目ぐらいのときに書いた本稿にいま目を通し直すと、現在と同じことを考えていることに驚かされる。本文中に「私は入園当初の頃が好きです」とあるが、やはり今も4月の何とも混沌として、どたばたして、西も東もわからない子どもたちとあたふたあたふたしている時期が好きである。

まだ3年か4年しか生きていない子どもたちが、突然知らない所に送り込まれて、緊張し、保育者に対しても警戒し、様々な姿を真っ新に見せてくれる。目を合わせない人がいたり、保育者が声をかけるとブンと横を向く人もいる。口も利かない人は幼稚園を嫌がっているのかと思うと、帰宅後は「先生がこう言っていた、先生がこうしていた、先生がこうだった」と話しているということもあっ

た。子どもたちは何かを思いながら入園当初を過ごしている。そういう姿が好きで、この人たちとこれからどうやっていこうかと思われてきた。

また、本文中に「私の保育といっても、それは私一人ががんばってみてもどうしようもないことで、こども達と一緒に生活してはじめてできること、そしてこども達と一緒に創って行くことのように思います」とあるが、これも最後の年度に感じていたことである。

同じく本文にある「こどもたちの話していること、していることに耳を傾け、目を向けなければと今さらながらに思います」というこの辺りが、まさに実践の最後になって自分が言えることかと思っていたことであつた。改めて考えてみると、やはり保育は原点にかえて、子どもたちと作っていく生活だと思う。

## 「かしわもちやさん」

今でも、「あの「かしわもちやさん」のときね」と他教諭の話題に上るような、とても楽しかった事例である。

年中組のゴールデンウィーク明けのある日の出来事で、4月の様子から気掛かりだった二人の男児A夫とB夫が中心である。A夫は年中組に入園してきた児で、B夫は三年保育児だが年少組では隣のクラスだったので、二人とも担任してから1カ月である。A夫は保育者と会っても目を逸らすことが多く、人が遊んでいる所に行ってもちょっかいを出すような屈託のある人だった。B夫は、部屋の隅に積み木で囲いを作った中で座って一人で絵を描いたり本を読んだり、何かブツブツ話しながら閉じている印象を与える人だった。保育者は何かあるのかなと思いつつも、関わるきっかけがつかめないでいた。

ある日、この二人が保育室の横の長い廊下にい



吉岡晶子氏

ろいろな物を運びだしていた。二人が他者の邪魔をするのではなく、ゼロからスタートしている姿が新鮮に感じられ、しっかり付き合いたいと考えた。その場所が安定することを願い、椅子などを並べたところへ「じゃあ、ここはあなたたちの場所ね」とござを敷いた。

二人の様子を見ていると、段ボール紙を丸く切りぬき色をぬったものを作りながら、A夫が「かしわもち作ってるんだ」とつぶやいた。その段ボールの紙は、何かに使えるかと思って、保育者が丸や四角などのいろいろな形に切ったものを材料棚に何げなく置いておいたものだった。せっかくだったらかしわもちらしくしようと考え、「じゃあ、葉っぱを作ってあげる」と言って、緑色の紙を葉っぱの形に切って包むと、A夫も「いいよ」と受入れたので、これはこの人のイメージには合うのだと思い、一生懸命包んであげていた。

B夫も真ん丸いかしわもちを作っていたので、保育者だけでは葉っぱ作りが間に合わず、保育室の中でいつも一人で描画や製作活動をしているC子に声をかけた。C子はしっかり者で手先も器用だが、自分から人に働きかけることがあまりない人だった。「手伝って」という保育者の呼びかけに応じて、すぐ来て手伝ってくれた。そうして、素朴ながら素敵なかしわもちらしいものが沢山できてきた。

そのうち、A夫が保育者に「かしわもちやさんって書いて」と頼んできた。A夫から保育者に頼む姿は珍しく、「かしわもちやさん」なんだと思って応えた。せっかくだから素敵なお店やさんにしようと思い幼稚園にあるお店やさん用の台を用いることを提案したが、A夫のイメージに合わなかったようで、保育者はあっさりと提案を引っ込めた。次に保育者は、楽しい場になることを願って、お客さんが買いに来てくれるようにと「かしわもちやさんやっているから買いに来て」と宣伝した。お客さんが来ても、A夫やB夫は売り買いには関心をもたず、保育者が行っていた。そうするうちに立ち寄る人も増え、元気のいい人が来ては売り子になるなど、それぞれが適当に自分の居場所を見つけて、作ったり売り買いをしたりということが始まった。隣のクラスの人も参加し、隣のクラス担任も「袋に入れて売ったらおみせやさんらしくなるから」と袋を持ってきてくれた。

遊びをやり終わった後に振り返ってみると、A夫、B夫が他者の参画を拒まなかったことが印象深い。A夫とB夫のイメージとは異なるおみせやさんになったかもしれないが、二人のやりたいことは保障されていた。A夫も何かを壊すような人に対して攻撃的になるような姿はなく、B夫も自分をどんどん閉じていくような感じは見られなかった。人を受け入れながら自分の居場所を見つけて自分らしくいられる姿があった。C子は、自分の得意分野で活動できたことで達成感を味わった様子が見られた。このように、いろんな人がいろんなことをそれぞれに行うことが出来、楽しめた場所だった。「みんな力を合わせた」訳ではなく、それぞれに「今日は面白かった」と思えた日だったのではないかな。

保育者は、この場面で二つの役割を担っていたと考えられる。一つは、年度の初期に子どもたちを大事にしたいと思いつつ、それぞれがそれぞれに居られて楽しかったと思える居場所にしたいと願い、それを支えた。忙しい新学期にもかかわら

ずその場に居続けたことで、その場を支える役を担っていた。もう一つは、子どもたち同士のコミュニケーションがまだ十分でないときに、何気ない小さな「物」が大きな役割を果たした。その一つがかしわもち。ゴールデンウィーク前に「子どもの日」の集いで全員がかしわもちを食べていた。「かしわもちね、この間食べたね」と共通に想起でき、みんなをつなぐ役を果たした。葉っぱ作りの葉が子どもの間をつなぎ、隣の担任が持ってきてくれた紙袋が子どもたちを元気にさせてくれた。「はい」と、かしわもちの葉っぱを渡すだけで誰かがそれを包んでくれたり、袋を渡すと誰かが詰めてくれたり、物が子どもたちの媒介役となった。

「かしわもちやさん」は保育者が計画したわけではなく、いくら楽しい活動でも次年度にも行われたわけではない。この時のA夫・B夫と共に、保育者がここを何とかしようと思ったことで成り立った「かしわもちやさん」だった。子どもの思ったことと保育者が一緒になって、何かがつながったからやれた遊びだったと思われる。

## 「電車ごっこ」

3歳の1学期の事例で、「空間の使い方」をテーマに分析したことがあるが、今回は3歳児の一人ひとりの思いに着目したい。

この時の3歳児クラスは男の子十人のうち八人

ぐらいが電車が好きで、毎日、木製線路をつなげる電車ごっこで遊んだ。写真の場面では二人の兄の電車の色が赤ばかりだが、この人たちが赤が欲しかったのではなく、別の一人が緑と青ばかり独占するので結果的に赤になっている。でも、けんかするほどではないというような様子であった。保育者も「毎日毎日、みんな好きだねえ」と電車ごっこを受け入れていた。

ある日、線路をつないでいき、保育室の出口でちょうど線路を使い切り行き止まりになったところ、ある兄がそこに立って「電車でお外も行きたくないあ…」とつぶやいていたことがあった。でも、どちらかというとインドア派の兄で、「外に出していい？」などとは言わない人だった。「この人、電車と一緒に外に行くのかな」と思われた。

そこで、機会があったら電車でお外まで出て行けるようにと考え、「線路が足りない」と言われた時はいつでも「いいよ」と言おうと思い、線路とほぼ同じぐらいの大きさの紙を切って部屋に置いておいた。

そうしたある日、別の兄がやはり線路がなくなって「終点だあ」って言ったので、「こういうのがあるけど、つないでみようか」と紙を出したところ、受け入れられた。紙だったので、階段もくねくねつないで線路は部屋から出て行ったが、子どもたちは部屋からの延長なので上履きのまま出ていった。

その翌日、「先生、昨日のあれ、やっていい？」と申し出があり、紙を出したら園庭に延々とつないでいった。子どもたちは下を向いてセロテープで貼っているので、紙がなくなりそうになると慌てて保育者が紙を切って出していった。子どもたちは上履きのままなので砂のほうには行かないで、部屋と庭の中間地点をどんどんどん、どんどんどん、うつむきながらつないでいった。すると、頼んでいないのに、年長兄が年長組の保育室の前に並んでいた植木鉢やブランターをどかしてくれた。どかせない大きな障害物の直前では、



紙を90度に貼り付けることで線路が向きを変えた。

年長児・年中児が近寄ってきて、砂で山を作ったり段差を作ったり、いろいろ手伝ってくれた。年長児が手伝うと複雑になり、線路に分岐点が出来て他方面に伸びていったので、紙は何百枚の単位で使った。

降園間近になると、「ガタン、ガタン」と言いながら、長時間かかってバックして保育室まで帰った。スタートした保育室に後戻りする子どもの姿に驚かされた。後戻りを始めた姿をみて、自分で区切りを付けているこの人たちには時間がかかってでも任せようと思った。

入園後間もない比較的インドア派の人たちが、外に走って飛び出していくのではなく、保育室での遊びの延長として少しずつ外に出て行った。靴を履き替えることなど考えもせずに出て行って、ちゃんと保育室まで戻り、自分たちの部屋は保育室だと思いながら過ごしたという事例であった。ぱっと飛び出していったからじわっと自分の空間にしていく人と、ぴよん行って自分の居場所を作ってつないでいく人がいると思うが、この人たちは前者であった。まず線で伸びていき、ゆくゆく面の活動になっていく。保育室から園庭の「お山」に紙の線路をつないで行った人が、次は保育室に直行せずに自分の好きな別の所に行った辺りで、活動場所が面になっていった。

その後も電車ごっこはずいぶん続いた。暑い日に水遊びをしていたら、水の中にまで線路を貼っていく人がおり、水遊びの人も線路を受入れ、「ガタン、ガタン」と言いながら水中まで出て行ったりした。別の日には線路が立体的になり、積み木を重ねて高架が作られた。また園庭の「お山」でござを敷いて自分たちのお家を作った際には、そこから紙でつないで線路を作って、大好きな花壇の畑を目指して下りて来た。

梅雨の雨天時には、保育室から廊下に出た。幼稚園は古い建物なので敷居があって段差がある。そこも飛ばさず何とかして乗り越えられるように、

細かく積み木使ってやっと出て行った。突き当りでは曲がらずに、消防ホースの収納箱まで行き、その下で曲って広い廊下に出て行った。レールが足りなくなったとき、保育者は他のクラスに借りに行ったが、子どもたちは保育室にある積み木とブロックをつないで延ばしていたので、借りてきた線路はそのまま返却した。

何かをつなぎながら外に出て行き保育室と外とをつないでいく、そういう人たちだった。

2学期の雨の日、隣の組にも線路があると分かっており、勝手に隣の組から線路を借りてきてつないでいた。このときには「向こうまで行く」と宣言し、突き当たりの奥の方まで行くと決めてどんどんつないでいった。そのうち線路が足りなくなり、仕方がないので保育者がスタート地点にあった物をまた籠に入れて、先に持って行っていた。年長児は変だと思って「あれ？」と言うが、年少児たちは平気だった。とにかくゴールしたいから、目の前にあるのをどんどんつないでいった。ずーとつないで目的地の突き当たりまで行ったときには降園時間が迫っていた。「良かったね、終わりにしよう」と提案すると、「ここで曲がります」と言って終了にならない。このときは、曲がるのは止めてもらい「あとは年長さんにやってもらおう」とか、「続きはお願いしよう」と言って年長児に依頼して終わりにした。

この事例では、この人たちが電車好きであることに保育者も付き合おうと考えており、部屋の中にいることが多い人をどうやって広げていくのかと課題意識をもって過ごしていたので、「ああ、この人たちはこうやって広げていくんだ」ということを、一緒に付き合うなかで知ることが出来た。付き合いながら、子どもたちの力にも随分と驚かされ、やはり子どもと一緒に作ったという思いが強い事例である。

この子どもたちは、年中組になると部屋にあるもう少し大きい積み木をつないだり、段ボールの電車に自分が乗るなどして遊び、広義の電車ごっ

こは続いた。

集団生活の中では、その人らしさまで子ども自身が見つけなければならないが、自分が自分の中にため込んできたものがその人らしさとして表れる。保育者は、やはりそれを出させてあげたい。

また、いろいろな出来事が重なり合って、子どもたちは、線路に象徴された秩序なり、「あ、これはまずいぞ」とか、「こうしないほうが楽しいな」とか、「こうしたほうが心地いいな」とか、生活の中の経験からその人の感覚を通して学ぶ。最初から集団での心得を指導するのではなく、その人が今まで持ってきたものを集団の中で出してから修正していくことだと思う。

#### 参考文献：

吉岡晶子「私の保育：子どもたちと私」『幼児の教育』77-10、1978

吉岡晶子「なりきる」『幼児の教育』90-1、1991

吉岡晶子「かしわもちやさん」『幼児の教育』107-5、2008

(文責：たざわ・かおる 聖学院大学人間福祉学部  
児童学科教授)